『通常物懸圖教授法（明治一一年）』の語彙とその性格

The analysis of vocabulary of TSUJOBUTSU-KAKEZU-KYOJUHO(1878)

大橋敦夫
Ohashi Atsuo

要旨

明治初期に作成された図解語彙集のうち、「通常物」と銘打たれたものを三種比較する。すなわち『通常物図解便覧』（明治九年）『通常物図解問答』（明治一〇年）『通常物懸圖教授法』（明治一一年）である。異版はまだ存在すると目されるが、当時の「通常物」の基本語彙について、ある程度の目安を示すことができたと言える。また、同時期の類書分析の視点を考察することも本稿の目的である。

キーワード：日本語語彙・明治期語彙・『通常物懸圖教授法』

一　はじめに

前稿（1）で翻刻した『通常物懸圖教授法』（明治一一年）の語彙について分析する。拙稿（2）で扱ってきた同種の資料との対照により、それぞれの資料が持つ特質を浮かび上がらせることが本稿の目的である。

二　資料の紹介

まず、書誌的事項を示す（図版は前稿参照）。

『通常物懸圖教授法』（明治一一年一二月発行）
福島師範学校教長榧木寛則編纂
大月疇四郎著（編輯人）
三春書林　川又氏蔵

出版人　川又定蔵（福島県下田村郡三春町）

見出しに内表紙。本文一七丁。一七丁裏に刊記。凡例・題言なし。和装タテ二二・五×ヨコ一五・二cm。濃紺色表紙。

懸図を見開きで示し、次の丁の見開きで各語の解説を提示する。懸図は、全八枚。一図に収録する語は、二五語。合計二〇〇語を収録する。

三　『通常物懸圖教授法』（明治一一年）の語彙の特徴

三―一　意味分野から見た語彙の特徴

全八図が、それぞれどのようなテーマで作成されているかを見ると、おおよそ次のような構成と考えられる。

第一……建物の分類・建物の外側部分の名称。
第二……室内で用いる調度品。
第三……農具。
第四……織機・裁縫・文房具・化粧道具。
第五……大工道具。
第六……衣装。
第七……食器・釣り道具等。
第八……明治期事物（開花語）。

本資料は、語釈文の中で、「器財・工具・文具」等の定義をしていない。よって、前稿までの資料との対比ができないが、「器財」に分類されるものが、（後述の共通に掲出される語との対照を通しても）多いと言える。（なお、資料によって、分類が異なる例が若干例見つかる。たとえば、「ハリ（針）」。『通常物図解便覧』では、「工具」、『通常物図解問答』では、「器財」に分類している。）

三―二　同種の資料との語彙の一致度

続いて、前稿までで扱った二種の資料との語彙の一致度について見てみる。

A『通常物図解便覧』（明治九年）……二五二語
B『通常物図解問答』（明治一〇年）……二三〇語
C『通常物懸圖教授法』（明治一一年）……二〇〇語

まず、二資料間の対比では、

A∩B……一七二語
A∩C……六三語
B∩C……六六語

となり、『教授法』は、『便覧』・『問答』との一致度が三分の一ほどに落ちる。その結果、三資料に共通の語は、

A∩B∩C……五二語

となる。具体的には、次の語詞である（表記は『教授法』による）。

イトグルマ・ウス・カギ・カサ・カマ・カミソリ・カヤ・カラウス・カンナ・キリ・クギ・クギヌキ・クシ・ケンビキヤウ・コテ・ザウリ・サジ・ジヤウキセン・シヤウジ・スキ・スリバチ・セキバン・チキウギ・ツヅラ・デンシンキ・トイシ・ナガモチ・ナハ・ノコギリ・ノミ・ハカリ・ハシゴ・バ

シヤ・ハリ・ヒノシ・ヒバチ・フクサ・フスマ・フロオケ・フロシキ・ブンマハシ・ベウブ・ボタン・マクラ・マナイタ・ミズイレ・ミノ・モノサシ・ヤスリ・ランプ・ワサビヲロシ

日常生活でよく目にする物と、開花期特有で顕著な物と言える。

三―三　項目語・語釈文の用語・ルビに見られる特徴

次に、『教授法』の項目語・語釈文の用語・ルビに見られる特徴について挙げていく。

［語詞］

①　開花語（出版時の時代を反映した語）

◇項目語

瓦斯燈（ガストウ）・避雷柱（カミナリヨケ）・軽気毬（ケイキキウ）・互更針（コンパス）・写真鏡（シヤシンケウ）・歩輓車（ジンリキシヤ）・晴雨針（セイウシン）・望遠鏡（トウメガネ）・避雷柱（ヒライヨケ）・喞筒（ポンプ）・洋燈（ランプ）

◇語釈文の用語

瓦斯（ガス）・玻璃（ガラス）・挽夫（クルマヒキ）・水晶鏡（スイシヤウメガネ）・停車場（ステイション）・玻璃管（ビードロクダ）・馬口鉄（ブリソキ）・モール・洋算（ヤウザン）・越歴（ヱレキ）

②　外来語

◇項目語

襏襫（カツパ）・玻璃鏡（ビードロカガミ）

◇語釈文の用語

アルミル［＝アルミニウム］

③　死語（現代生活では役目を終えている語）

◇語釈文の用語

鎖鑰（サヤク）・餌（ヱバ）

［表記上の特徴］

①　現代とは違う漢字表記

◇項目語

紡車（イトグルマ）・金＋奄（カナヅチ）・招牌（カンバン）・荷包（キンチヤク）・千釣（クギヌキ）・炭斗（スミトリ）・擂盆（スリバチ）・拂塵子（チリハラヒ）・土豚（ドヘウ）・乂＋、手（ニクサシ）・梱（ネズミトリ）・簷帷（ノレン）・燧具（ヒウチダウグ）・鈷鉤（ヒノシ）・火鉗（ヒバシ）・火爐（ヒバチ）・吹火筒（ヒフキダケ）・巾＋巴（フクサ）・肉几（マナイタ）・秒把（マンガ）・水瓶（ミヅガメ）・提嚢（ヨツデアミ）・薑擦（ワサビヲロシ）

◇語釈文の用語

銅線（アカガネハリガネ）・明窗（アカリマド）・糸端（イトサキ）・鏡架（カガミタテ）・帛類（キヌルイ）・鉛字（クワツジ）・國疆（コクケウ）・物價（サウバ）・軸木（シンギ）・擂木（スリコギ）・精好（セイガウ）・鉄線（テツハリガネ）・鉄車＋几（テツミチ）・屈膝（テ

フツガヒ）・田圃（デンハタ）・酒壜（トクリ）・把子（トツテ）・把手（トツテ）・金＋目＋止鉄（ハガネ）・繁花（ハンクワ）・焼火場（ヒタキバ）・蒔画（マキヱ）・明了（＝明瞭）・綿絮（ワタバナ）

②　現代とは違う読み

〔音訓の組み合わせが違う〕

◇語釈文の用語

鉄管（テツクダ）・墓所（ハカシヨ）・両輪（リヤウワ）

〔音が違う〕

◇語釈文の用語

便宜（ビンギ）・煉化（レングワ）

〔訓が違う〕

◇語釈文の用語

束ね（ツガね）

〔清濁が違う〕

◇語釈文の用語

案山子（カガシ）

〔長音（無表記か？）〕

◇項目語

行李（コリ）・投網（トウアミ）

◇語釈文の用語

籐（ト）

③　ゆれ（清濁・音訓）

◇語釈文の用語

金類（カナルイ・カネルイ）・鎮鍮（シンチユ・シンチウ）・両端（レウハシ・リヤウハシ）・両側（レウハシ）

④　熟字訓

◇項目語

喬杵（イネカケ）・夾帑（カミイレ）・揪笊（クマデ）・煙突（ケムリダシ）・羹匙（サジ）・毛褥（シキモノ）・墨斗（スミツボ）・酒鑽（センヌキ）・紡錘（ツム）・風扇車（トウミ）・龍骨車（フミグルマ）・水滴（ミズイレ）・攪車（ワタクリ）

◇語釈文の用語

開閉（アケタテ）・温暖（アタカ）・前後（アトサキ）・際（アハヒ）・数多（アマタ）・雨滴（アマダレ）・一階（イチダン）・室内（イヘノウチ）・百般（イロイロ）・種々（イロイロ）・後方（ウシロ）・内部（ウチガハ）・映写し（ウツし）・物器（ウツワ）・上面（ウハツラ）・表面（オモテ）・冶工（カジヤ）・堅質（カタキ）・紙片（カミキレ）・金類（カナモノ）・関捩子（カラウスザホ）・機関（カラクリ）・軋轢（キシ）りて・蚕（キヌ）・削刀（キレモノ）・塞子（クチ）・頸部（クビ）・黒線（クロスチ）・毛髪（ケ）・細微（ゴクコマカ）・事由（コトガラ）・児童（コドモ）・粉末（コナ）・穢物（ゴミ）・塵汚物（ゴミ）・尖頭（サキ）・装置（シカケ）・石灰（シックイ）・標点（シルシ）・細切（ス

サ）・墨水（スミ）・刷行（スリダ）し・外面（ソトガハ）・外囲（ソトマワリ）・焼（タ）き・竹輪（タガ）・裁縫（タチヌヒ）・経糸（タテイト）・経緯（タテヨコ）・胸壁（タマヨケ）・塵汚（チリ）・製（ツク）り・泥土（ツチ）・通常（ナミ）・庭砌（ニハ）・並行（ニホン）・緯糸（ヌキイト）・螺旋（ネジ）・寝処（ネマ）・昇降（ノボリヲリ）・乗客（ノリテ）・機架（ハタ）・橋梁（ハシ）・銅線（ハリカネ）・線（ハリガネ）・光線（ヒカリ）・廣告（ヒロメ）・紙障（フスマ）・二種（フタイロ）・布告（フレ）・火綿（ホクチワタ）・瞬間（マタタクヒマ）・直角（マツカク）・平直（マツスグ）・前面（マヘ）・符（マモリ）・圓径（マル）・周辺（マワリ）・道路（ミチ）・水銀（ミヅカネ）・流液物（ミヅモノ）・胸部（ムネ）・標準（メアテ）・目標（メアテ）・目標（メジルシ）・鏡（メガネ）・花紋（モヤウ）・陶器（ヤキモノ）・柔質（ヤハラカ）・柔毛（ヤハラカキケ）・木構（ワク）・温袍（ワタイレ）・活発し（ヲコし）・曲折（ヲリマガリ）

⑤　文選読み

◇語釈文の用語

軋摩し（ウチアハし）・密接し（クツツケ）・乾縮せぬ（チグマせぬ）・迅速（ハヤキ）なること・混和する（マゼル）・平直（マツスグ）なる・粉砕する（フンサイする／コナス）・活発し（ヲコし）

四　まとめ

前稿と比べ、捨て仮名の用例が拾えなかった。

また、熟字訓に挙げた用例のうち、漢字の訓読みを重ねたと目されるものが若干あった。これらの中には、昨今、日本語教育分野を中心に注目されている「やさしい日本語」のヒントになる例（漢語の和語への言い換え）が豊富に見いだせる。まさに温故知新である。

五　おわりに――今後の課題――

同種の資料を重ね合わせて考察することで、それぞれの資料の性格付けが進んだ。それとともに、どの資料にも共通して取り上げられている語彙の絞込みが行われることとなった。すなわち、当時、「通常物」と目されたものの基本語彙である。

本稿執筆中に、前稿で予告した資料（『通常物必要図解』（明治一〇年））以外に、『博物圖諺解』（明治九年）を閲覧した。「通常物」とよく似た編集がなされており、対象分野に相違はあるものの、類書として考察の視野に入れていきたい。

また、特徴的な語の語誌についても、それぞれに分析を重ねていきたい。

［注］

1　拙稿「《翻刻・索引》『通常物懸圖教授法』（明治一一年）」『上田女子短期大学紀要』三九（二〇一六・一）

2　拙稿「『通常物図解便覧』（明治九年）の語彙とその性格――付、語彙索引」『学海』一八（上田女子短期大学国語国文学会二〇〇二・三）

拙稿「『通常物図解問答』（明治一〇年）の語彙とその性格――付　語彙索引――」『上田女子短期大学紀要』二六（二〇一三・一）